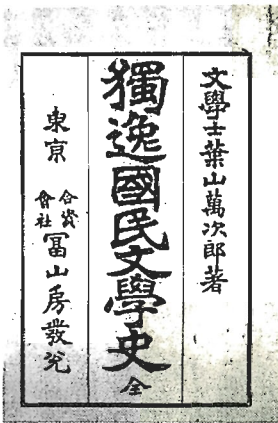


書の朗読などがあった（大正元年11月号『龍南会雑誌』）。杉山は次のように述べた。

桑野は幼くして父を失い家庭不如意のため、教育も系統的でなく独立独歩で今日まで来た。彼は片時も本を離さず博覧強記、何んでも或る程度まで知っていた。特に語学では英仏独羅典なかんづく清国語は得意で、近年はアラビア語に熱中していた。彼は同僚にしばしば常識論を唱えていたが時として自ら常識を逸せることもあった。つまり矛盾点なしとは認められなかったが、その性質が却って天才であることを示しているのではないか。要するに、有為な才能を持ったまま世を去ったのは同僚はもちろん学界においても痛恨の至りと思うであろう。

ここには桑野礼治という人物の本質がよく捉えられており何も付け加えることはない。ただ筆者はこの小文によって、今では忘れられた明治ドイツ語教育界の一異才の存在を伝えられたら満足である。

『独逸国民文学史』 著者 葉山万次郎



葉山万次郎

葉山万次郎は明治10年（1877）12月3日、松浦武士と学者の伝統をもつ葉山家の長男として長崎県平戸市に生まれた。父・葉山左内は九代目で、松浦家に仕える武士であったが、維新後は型のごとく貧乏士族で、万次郎の学業の前途は暗いものであった。

葉山家の祖先は豊臣家の浪人で、渡辺姓で松浦家に仕えて葉山姓に改めた。その七代目の鑑軒は佐藤一斉の門下の漢学者で、詩人としても定評があり同時にまた松浦静山の重臣で藩政に参与した。嘉永3年に吉田松陰に、山鹿流の兵学を講じ、海防論

「辺備楢葉」を説くなど、経綸の才もあつたらしい。八代日の野内（盤字）は心月公（松浦蟄）の伝役で重臣を勤めたが、学者、詩人というより重厚で大人の風格を備えた実務型の人物であった。維新前、風雲急な時代の藩政担当者の中で、積極派の安藤藤二、堅実派の村尾平格が対立する間に鼎坐して、調和を取りつつ難関を乗切って、主家を西海の藩主から伯爵家に推移させることに成功した。つまり中道を行く地味な実務家であった。万次郎の父左内は、純詩人型で、酒を愛した。豊かな家庭で漢詩文の中で生まれて、趣味に専らであったので、維新後の世渡りには困った。（以上は主に林常夫述「兄葉山萬次郎を偲ぶ」〔ガリ版20頁、昭和36年〕による）

万次郎は明治23年（一八九〇）9月、平戸の私立尋常中学猶興館に入学した。猶興館中学の前身は、猶興書院と称し明治13年に開設されたもので漢学、歴史、算術等を教えていたが、これでは時運に処して普通科目が不備であった。それで一応これを閉鎖し、新に中学程度の私立中学を作ることにした。そして明治20年5月、尋常中学猶興館として開校した。5年制で他の

普通科目と並んで第一外国語（英語）と上級では第二外国語（独語）も置かれた。だが、万次郎は一年生の時、数え年15才の折の明治24年、猶興館館主・松浦詮伯爵（館長は松浦縮蔵）の幼孫・陸の伝役として上級生の蒲生保郷と共に抜擢されて上京することになった。従って万次郎はまだこの段階ではドイツ語を学んでいなかった。

さて、上京後は松浦家（当時松浦伯は浅草向柳原町に住んだ）に仕え、同時に向学の道が開かれた。つまり宮仕えをしながら、杉浦重剛の日本中学校を振出しに、第一高等学校、東京帝国大学独逸文学科を卒業することが出来たのである。実弟林常夫が伝える当時の逸話を紹介しよう。上京して最初の冬の夜、夜廻りの役が当たり、万次郎は浅草邸の広い蓬来園を巡回中、池の向岸を半眠で歩いていると、詠帰亭というお茶屋の横にあった泥壺の中に落ちた。長屋に帰っても小使を起こす勇氣も出ず、寒中裸体になって井戸水で身を清め、着物を洗い、これを明日どうやって乾かさかまで気に病んで、泣きながら寝たという。勿論翌日に周囲の同情を受けはしたが、他人には愛されても親に頼れず、自分の事は自分で処理し、どんな苦難にも忍ぶという習性がこうして養われていった。

また、松浦家に奉公しながら学生時代を過ぎた11年間の修養は、躰の面でも影響を与えたに相違ない。名君で茶人心月公によっても知られた松浦伯爵家の家風を想像すれば、十分である。万次郎は例えば、外出中は「暑くとも決して洋服の上衣を脱がぬ」という習慣を生涯持続したという。また他人の前では不作法をせず、端然と形を正した。これが彼に一種の威容を与え、そこから折目正しい学究という印象も生まれたようだ。

さて、万次郎は日本中学校から一高に進み、明治32年に同校文科を卒業した。一高の同窓会名簿をみると、一緒に塩谷温や吉沢義則も卒業している。なお、一高では吉田謙次郎、保志虎吉、藤代禎輔、ボルヤーン、プッチール等にドイツ語を習ったと思われる。吉田と保志は旧世代のドイツ語学者であるが、藤代は気鋭の独文学者として頭角を現わしつつあった。次いで東大独文科に入学したが、ここでは専らK・フローレンツの薫陶を受けた。東大独文科は創設以来まだ日が浅く卒業生も少なかったが、錚々たる人がいた。明治24年の第一回卒業生には前記藤代禎輔がおり、26年に上田整次、30年に登張竹風、青木昌吉、31年に二十世紀独和辞書で知られた藤井信吉、32年に我が国神話学の開拓者の高木敏雄を出している。葉山万次郎は明治35年7月卒であるが、この時一緒だった人に独文科始まって以来の頭脳明晰をうたわれた片山孤村（正雄）がいる。36年には高山樗牛の弟の齊藤野の人（信策）、37年には桜井天壇（政隆）を出している。彼らの師のフローレンツは、日本学、特に古代文学の研究で知られているが、こうしてみると独文学教師としての功績も大きかったことに改めて気づく。

『独逸国民文学史』は明治37年9月に富山房より出版された。菊判、本文586頁、それに人名索引7頁が付いている。『富山房五十年』に収められた万次郎の思い出によると、大学を卒業したばかりの彼を版元に紹介したのは上田万年であり、8カ月で書き上げたものだという。出版理由については、「本書は名づけて独逸国民文学史と云ふ。我国の学术界と最も親密の関係ある独逸国の文学史が広く吾人に紹介されざるは、我現時の文壇に於ける一大欠点なり、敢て小冊子を編述せし所以は、一に聯此欠を補はんとするにあり。」（凡例）と述べている。全体は四編より成る。即ち第一編「叙説」、第二編「古南独逸語時代」、第三編「中南独逸語時代」、第四編「新南独逸語時代」である。これは文学の発達時代区分を、言語の発達または変遷の

時代区分と一致させたもので、これはクレー（G. Klee）がドイツ文学史概要において用いたものと同一である。そして各編中に記載された内容は、クルーゲ（H. Kluge）のドイツ国民文学史に依った部分が特に本書の上半部に見られる。著者はこれら二書の外に十数種のドイツ文学史を列記しているので、それらも参考にしてまとめたものであろう。本書を読んで誰でも気が付くのは、記述が雑駁で繁簡の適切でない点であろう。『ヒルデブラントの歌』（ゲルマン英雄叙事詩）からゲーテ、シルレルまでは詳しく、ロマン派から19世紀文学までが極端に簡単になっている。それは著者も序文で認めているが、本書の最大の欠点であった。比較的詳しい前半についても専門家から見ると不完全な点が少なくなかった。その点を桜井天壇が『帝国文学』（明治37年11月号）において具体的に指摘している。このように本書には種々の欠点があったが、当時ドイツ文学が我が国の文学へ浸透しつつあったので、その出版は時宜になかったものだった。これ以前には、明治29年に五十嵐力が、ヴィルヘルム・シューラー著『ドイツ文学史』の英訳本をもとにした『近世独逸文学史』を出したが、それから8年が経過しているうえに、五十嵐のものは東京専門学校の文学講義録に連載されたものだったので、既に入手しがたくなっていたと考えられる。今日から見れば『独逸国民文学史』は明らかに物足りないが、これだけの大著を短期間に書き上げた著者の力量と、いち早くドイツ文学の通史を読者に提供した功績は認めてもよいであろう。とにかく明治期のドイツ文学の紹介史・受容史にとって逸せられない一書である。

翌38年5月、シラー没後百年を記念して『帝国文学』臨時増刊第二として「シルレル記念号」が発行された。410頁の大冊である。執筆者は殆ど東大独文科出身者であった。登張信一郎、片山正雄、石倉小三郎、葉山万次郎、三浦吉兵衛、藤代禎輔、山岸光宣、桜井政隆、橋本忠夫、藤沢周次、それに当時只一人の学生として東郷茂徳が執筆している。他に深田康算、国文学者芳賀矢一なども寄稿した。万次郎は「シルレルのワイマール時代」「戯曲『ウィルヘルム・テル』評論」の2篇を担当したが、後者はわずか13頁で、テル劇の梗概を平易に叙述しただけで、ほかの人の評論に比べて見劣りがする。彼自身「其の評論に至りては研究未だ浅くして此の曲に対する自家の定見確立せず」と述べている。

さて、万次郎は大学卒業後、大学院に籍を置いたが、明治36年9月文科大学講師、同41年9月一高独語嘱託講師を経て、42年8月に同教授に就任した。執筆活動が最も活発だったのも明治四十年前後である。一時編集委員を務めた『東亜之光』には、「オットー・ルードキッヒに就て」（明39・12）を手始めに「グスターフ・フレンセン」「独逸近代文学の概観」「戯曲『幽霊』についての所感」「イプセンの人格と性行」等の評論を発表した。また『帝国文学』には前記「シルレル記念号」以後に発表したものとしては、「独逸近世戯曲と方言」（明40・8）「キールケゴールトの耶蘇教観」（同40・11）の2篇だけである。前者は、ズーデルマンのベルリン方言の戯曲、ハウプトマンのシレジエーン方言の戯曲が劇場で大評判となって以来、ドイツ各地の方言を用いた作品が次々と上演されるようになり、その功罪を論じたものだが、これはルドルフ・フォン・ゴットシャルの『近世戯曲評論』（Zur Kritik des deutschen Dramas, 1900）によって紹介した。後者は、キールケゴールが尊重したのは原始キリスト教であって、近代のそれではない理由を中心に論じたものである。独文学研究者としての活動はこの頃が最盛で、その後は見るべきものはない。以後ドイツ語教師としての活動が中心となるが、有名な一高野

球部の部長を長く務めていることも彼の生涯で忘れてはならない点であろう。最後の教え子で名選手であった内村祐之を野球部に入れるに際し、厳父内村鑑三が頑固して承諾しないのに懇望を重ね「決して学績を落さないから」と誓い、やっと許可をもらった。こうして内村選手時代が現出した。

大正10年には『戦後の独逸』を独語教科書の出版で知られた郁文堂から出した。四六判、二百頁。第一次大戦後のドイツの主として政治的・社会的状況を、ドイツの新聞や書物から材料を得てまとめたものである。当時はこうした情報も必要とされたが、今日読むには相当に努力がいる。

さて、万次郎は大正11年には一高教授を辞めて文部省督学官になった。これは留学の順番が廻ってこないのにしびれを切らしての転出だったのではあるまいか。翌年9月には早くも文部省から派遣されて学校制度研究のために独英米各国に出張している。そして帰国後は山形高等学校長、第七高等学校造士館長を経て、昭和9年8月大阪外国語学校長に就任した。こうしてかつての独語教師は教育行政官に変わっていった。

昭和17年4月、大阪外国語学校々長を免職となり、東京へ戻った。そして予約していた母校日本中学校長に就任した。が、昭和20年3月の東京大空襲によって当時杉並方南町の自宅は直撃弾を蒙って全屋灰に帰した。21年帰郷し、平戸市西ノ久保の旧家へ戻っていたが、昭和30年9月、財団法人松浦史料博物館が設立され、乞われて初代館長に就任した。「博物館が大体時代物の蒐集所である関係から、館長にも古色を帯びた者をあてることになり、私はその選に入ったのである」と、葉山万次郎談『平戸の対外貿易時代の話』（昭和36年）の中で語っている。

博物館には松浦家の古記録をはじめ、種々の古文書があるので、気の向くままに読んで行くうちに、何か書いて見ようという気になった。そして諸大家の書いた史実や史論を引用して、随筆の様な、物語の様なものが出来たのをまとめたのが『平戸の対外貿易時代の話』である。内容は、戦国時代から江戸初期にかけて平戸における対外貿易の状洗を、葉山家の先祖に関係の深い豊臣家と松浦家の動きとも関連づけながら描いたものである。松浦家第二十五世の道可から法印、泰嶽、宗陽、天祥の五代藩主時代が扱われているが、この時代は、日中間の交渉は一層盛んになり、さらに日本と東南アジア及び西欧との通商関係が平戸において結ばれ、我が国の西欧文化輸入にとって画期的時代であった。万次郎は謙遜しているが、四六判約80頁の小冊子にしてはよくまとまっており、この方面の知識を一通り得るのに適した本である。

葉山万次郎は松浦史料博物館々長に在職のまゝ、昭和35年（1960）10月7日、83歳の生涯を閉じた。墓所は平戸市鏡川町西の久保（^{うしほ}坊）にある。戒名は「獨嘯院憂嶺萬仞居士」である。息女・林三保子氏（船橋市在住）は、父の人格は円満で、淋しがりやであったと語っている。掲出の肖像写真は松浦史料博物館の岡山芳治氏の提供にかかる。

旧五高所蔵のドイツ語学書

熊本大学附属図書館の別館には旧制第五高等学校所蔵の図書が保存されているが、その中には英語・ドイツ語・フランス語など語学関係のものが多量に含まれている。旧制高校では語学